

Who Is Hannah?: 19 世紀米文学におけるバイプレイヤー考 Who Is Hannah? : Supporting Characters in the 19th-century American Literature

小松原 宏子

Hiroko Komatsubara

要旨: 2014 年と 2015 年、学研の「10 歳までに読みたい世界名作」『若草物語』『あしながおじさん』の編訳をする機会に恵まれた。それに際し完訳版および原書を読むなかで気づいたこと、この 2 作品を初めて読んだ子ども時代から心に留めていた、あるいは疑問に思っていたことをここで整理してみたい。今回は脇役ながら物語中で重要な役割を果たしている脇役たち---『若草物語』のハンナ、『あしながおじさん』の視察委員プリチャード---についての考察をまとめる。

キーワード: 若草物語、ハンナ、あしながおじさん、プリチャード

Abstract: In 2014 and 2015, I was given the opportunities by Gakken Co. to edit and translate big two pieces of American literature in the 19th century, “Little Women,” written by Louisa May Alcott and “Daddy-Long-Legs”, by Jean Webster. Through the job I thought about some supporting characters in novels, who are playing very important roles but not coming under the spotlight: Hannah, a servant in “Little Women” and Pritchard, a visiting committee in “Daddy-Long-Legs”. I would like to make myself clear about the issue of what I have been wondering about since I was a child, when I read these books for the first time in my life.

Keywords: Little Women, Hannah, Daddy-Long-Legs, Pritchard

1. 『若草物語』のハンナ

1-1 物語の概要

『若草物語』は 1868 年に書かれた、ルイザ・メイ・オルコットの代表作である。

物語はクリスマスに始まり、次のクリスマスに終わる。

南北戦争時代、マーチ家の四人の姉妹、メグ・ジョー・ベス・エイミーの父親は、牧師として従軍している。留守をまもるマーチ夫人と娘たちは、貧しい生活の中でも人を思いやる心を忘れない。クリスマスの朝には、近所に住む貧しいドイツ人の母子家庭・フンメル一家に自分たちの朝ごはんを届けに行く。

隣家のローレンス氏は裕福な資産家で、孫のローリーとふたり暮らしである。ローレンス氏は、マーチ家の母娘がフンメル家の人々を助けた話を聞き、豪華なクリスマスディナーを贈る。

その後、メグとジョーは招かれたパーティーでローリーと出会い、マーチ家とローレ

ンス家の交流が始まる。

四人の姉妹はそれぞれ失敗したり後悔したり病気になったりしながらも、愛し合い、慰めあい、母マーチ夫人の教育のもと、一年間でめざましい精神の成長をとげる。そしてまためぐってきたクリスマスに、戦地にいた父が帰ってくるところで物語は終わるのである。

1-2 物語の中核

この物語の主人公は作者ルイザ自身がモデルである次女のジョーとその三人の姉妹である。原題の“Little Women”は、戦地にいる父からの手紙で四人姉妹を指すことばとして使われている。「小さな淑女」とでも訳すべきだろうか。日本では初期の翻訳では『小婦人』として出版されている。邦題についての論考は脱線になるので割愛するが、いずれにしても四姉妹が物語の表題として使われていることには違いがなく、その意味では「若草物語」が一番原題から遠いことになる。

話を little women に戻すと、これは四人の娘のことなので複数形の women となっているが、women の単数形は woman である。

「この単数形の『my little woman』は当時、男の人から女の人への呼び掛けとしてよく使われたもので、特殊な言葉ではありません」（横川寿美子：『若草物語』の三つの映画化---あなたはどのジョーが一番好きですか？/ H26 年度 国際子ども図書館児童文学連続講座講義録より）

little women という言葉が最初に父親からの手紙の中に登場することから推測すると、ルイザたち姉妹も父ブロンソン・オルコットからそのように呼ばれていて、このことばに特別な思い入れがあった可能性が高い。

「ここでぜひこの本の原題にふれておかなければなりません。リトル・ウィメン (Little Women) ——これは作中では第 1 章の従軍中のマーチ氏からの娘たちへの手紙に用いられています。もともとブロンソン・オールコットの好んで用いた呼びかけでもありました」（矢川澄子：『若草物語』福音館文庫 あとがきより）

ブロンソンは革新的で著名な教育者であり、ルイザは父とその周辺の人物たち（ソロー、エマソンなど）から強い影響を受けていることはよく知られている。そして、『若草物語』では、マーチ家の父親は遠い戦地において最後の帰宅場面で登場するだけであるにもかかわらず、姉妹の精神に、ひいては物語全体に少なからぬ存在感を漂わせている。

そして何かにつけてその父の教えを説く母親のマーチ夫人、隣家のローレンス氏とその息子のローリー、気難しいながらも必要なときは一家を援助してくれるマーチ叔母さんも、それぞれにしっかりとキャラクターが立っており、生き活きとした描写で四姉妹の物語を支えている。

1-3 ひそかな重要人物---ハンナ

しかし、ここでひとつ奇妙なことがある。

家族の一員ともいえる家政婦ハンナの存在である。実在の人物をモデルとした主人公一家のキャラクターが非常に細やかに具体的に描かれているのに対し、このハンナのアイデンティティだけは、作中にほとんど現れてこない。

ハンナは、物語中に彼女自身、あるいは名前が登場する場面が 40 箇所にもものぼる主要人物の一人である。そして、目立たぬながら、ストーリーを動かす「陰の重要人物」でもある。

まずは、マーチ家とローレンス家との交流の始まりであるクリスマスディナーのプレゼント。これは、ハンナがローレンス家のメイドにフンメル家のことを伝えたことがきっかけになっている。ハンナの存在がなければ、マーチ家の善行がその日のうちに隣人に知らされることはなく、知らせるためにはマーチ家の人間自身が自らの慈善活動をひけらかさなければならない、という少々不適切な事態に陥ってしまう。

また、物語のクライマックスである三女ベスの病気の場面は、母であるマーチ夫人の留守中に起こったことであり、ここではハンナがすべてを取り仕切っている。ハンナは、ベスが死の危険を乗り越えるまでの看病を請け負い、その生還の目撃者となり、姉妹たちに回復の宣言をするという重大な役割を担っている。そもそもこの家にハンナがいなければ、マーチ夫人は娘たちを家に置いたまま重病の夫のもとに駆けつけることはできず、この感動的なシーンのお膳立てはすべて失われてしまうのである。

マーチ家の人間は、母マーチ夫人も四人の娘たちもハンナに絶大な信頼を寄せていると思われる。また、「servant（使用人）というよりは友達のように」という表現があったり、週に一度娘たちに料理を教えていることが姉妹たちの新聞に書かれていたり（ピクウィック・クラブ）する。

それにもかかわらず、ハンナが何者であるのか---なぜマーチ家の家政婦になったのか、どのような出自で何歳でどのような風貌でありどんな性格であるのか---は一切語られることがない。

一方で、演劇でいえばほんの「端役」でしかないマーチ叔母の家のメイドのエスターに関しては妙に詳しく語られている。エスターはフランス人で、熱心なカトリック信者である。そして、マーチ叔母のところに預けられた四女エイミーの話し相手になり、かわいい遺言状の証人にまでなる。Part 19 Amy's Will にしか登場しない、脇役というにも出番が少ないこの「チョイ役」は、その詳しい人物描写により、たった一回の出番で見事にその印象を植え付け、読者の脳裏に具体的なイメージを浮かばせるのである。

エスターとハンナは、ふたりとも初出のところでは old とある（old Hannah, old Esther）。ただし、同年代であったかどうかはわからない。

Hannah の名前が初めて登場する Part 1 Playing Pilgrims の最後の場面では、いきなり old

Hannah と出てくるだけで、何の説明もない。英語圏の子供には、それでハンナの立場がわかるということであろう。日本語版ではほとんどの訳者が「ばあやのハンナ」と訳しており、筆者もそれを踏襲した。確かに「ばあや」と書けばそれ以上の説明はいらない。old もそのような役割を果たしているのであろう。ただし、150 年前の話であるので、五十代、六十代、下手をしたら四十代後半でも old と呼ばれる可能性はある。実際、それほど年寄りであるようでもない（ハンナは薪を運ぶなどの重労働をしているし、エスターもてきぱきしていて、頭も体もしっかりしている様子がうかがえる）、現代でいう中年から初老、という範囲と考えられる。old という英語、「ばあや」という日本語のもつイメージが実際のハンナやエスターの年齢に合っているかどうかはわからない。

エスターとハンナは、同じ家に長年つとめていて、家族の一員のような存在である、という点ではよく似ている。

しかし、ハンナはマーチ家において「家政婦というより友達のような存在」(Hannah, who had lived with the family since Meg was born, and was considered by them all more as a friend than a servant) とあるのに対し、エスターのほうはマーチ叔母の家で「権勢をふるっていて、マーチ叔母はもはやエスターなしでやっていかれない」(Esther was a French Woman,-- (中略) ---who had lived with “Madame,” as she called her mistress, for many years, and who rather tyrannized over the old lady, who could not get along without her.) とある。

ちなみに、ハンナのほうは「メグが生まれたときからこの家にいる」とあるので、had lived が for 16 years であるとわかっている。エスターのほうは many years とあるだけなので何年かはわからないが、tyrannize (専制君主のように[として]支配する / リーダーズ英和辞典) するほどであるから相当長いのであろう。

エスターが気難しいマーチ叔母をも牛耳っているのに対して、ハンナはマーチ夫妻には絶対服従である。マーチ夫人の留守中には、四姉妹に対してマーチ夫人代理であるかのように支配的・監督的な態度をとるが、この時代、使用人といえども子供が大人に服従するのは当たり前だったのかもしれない、ハンナが家の中で優位の立場にいたことにはならない。

仕事ぶりに関していえば、物語中に出てくるエスターの具体的な仕事は、「マダム (マーチ叔母) のレースの手入れをする」ことと、エイミーに好きなようにマーチ叔母の貴重な宝飾品を見せながら、「つきっきりで見張って鍵をかける」ことである。あくまでイメージだが、掃除・洗濯・炊事に明け暮れている様子はない。なんとなく女性執事のような印象である。

一方、ハンナは実に働き者である。登場回数が多いのだからそれだけ多く働いていて然るべきなのだが、その内容は朝早くから夜遅くまで、いったいつ休んでいるのだろうと思うほどである。もちろん暖炉の前でうたたねをしたりもするのだが、五人家族 (父親が帰ってくれば六人家族) 分の家事をたったひとりで切り盛りしていて、クリスマスでさえ朝早くから休むことなく働いている。一度だけマーチ夫人が「ハンナに一日ひまをやる」

場面があるが、それもハンナのためでなく、四姉妹に労働のきびしさを教えるためなのである。物語終盤の、二度目のクリスマスでも、父親帰還の感動的場面において、ハンナは料理中の七面鳥をかかえたままドアのかげでひとり涙にくれている。家族のハグの輪には入っていない。

言葉遣いもまた対照的である。エステルはフランス人という設定なので当然なのだが、マダム、マドモワゼルを連発し、相手に向かって *she* と語りかける話し方は外国人らしい上品さ、あるいは、気取った雰囲気をかもしだしている。

“Which would Mademoiselle choose if she had her will?”

「(マーチ叔母から宝石を) ひとつただけるとしたら、マドモワゼルはどれをおえらび？」 (矢川澄子訳 福音館文庫)

一方、ハンナの話し方には独特の訛りがある。

“Goodness only knows. Some poor creeter come a-beggin’, and your ma went straight off to see what was needed. There never was such a woman for givin’ away vittles and drink, clothes and firin’;”

オーストラリア人の友人に読んでもらったところ、「どこの訛りかはわからないが、高等教育を受けていない人の話し方だと思う」とのことであった。筆者ははじめ、ハリー・ポッターに出てくる森番のハグリットの話し方に似ていると思った。学生たちから粗野だと思われる人物である。

1-4 Who is Hannah?---ハンナのアイデンティティをめぐる考察

2014 年、筆者は学研教育出版(現在の学研プラス)の「10 歳までに読みたい世界名作」というシリーズのなかで、『若草物語』の編訳の仕事をしていただいた。どこを削り、どこを残すか、大好きな作品であるだけにその葛藤もたいへんなものであったが、それだけに、美しい装丁で完成したときの感動はひとしおであった。

その過程で、編訳作業がすべて終了したあと、挿画のグラが来たときに、ハンナの容姿や服装が黒人に見えたときには意外な感じがした。子供のときに読んだときからのイメージでは、ハンナは白人の中年あるいは初老の婦人だったからだ。

意識してもう一度全編を読み直してみると、ハンナの個性についてはほとんど触れられていないことに改めて気づく。

ちなみに同じ学研による 2011 年出版の「マンガジュニア名作シリーズ『若草物語』」(原作 オルコット / マンガ nev) では、ハンナは恰幅のいい初老の白人女性として描

かれているが、それについても作中にそういった記述があるわけではないのである。

そして、調べるかぎりの出版物ではハンナの挿絵はほかに見つけることができず、筆者自身が最初に読んだ『若草物語』（原作 オルコット / 著者 富沢有為男 偕成社 1969 年）の挿絵の中にもハンナの絵は見当たらない。口絵の「この物語の主な人々」の中にもハンナは加えられていない。ということは、1960 年生まれで当時小学生だった筆者が白人のイメージをもっていたのは、単に外国の家庭のお話なのでそう思った、といったところだろう。昭和 40 年代、「外国人」といえば金髪に青い目の白人しか思い浮かばないような時代である。

後年、ハンナが黒人として描かれている挿絵を見ておどろいた記憶が確かにあるのだが、どんなに捜しても今のところその版は見つかっていない。そして、現在までに筆者が日本で見つめられたハンナの容貌を描いたものは、唯一テレビのアニメーション番組『愛の若草物語』（1987 年 1 月 11 日～12 月 27 日 Nippon Animation Co. LTD / キー局 フジテレビ）に登場する、ステレオタイプの黒人メイドのハンナだけである。アニメ化に際しては、原作の大幅な変更が見られるが、高視聴率を誇ったこの番組を見て育った年代（ほぼ現在の 40 代が中心であると考えられる）には、このアニメの映像が強烈に残っているものと考えられる。

実際、ハンナについて学研の編集部にお問い合わせしたところ、「黒人で問題ない」という回答であったが、のちに担当編集者とその話になったときにも真っ先にこの番組のことに言及された。要は、原作にはっきりとした記述がない以上、大多数の日本人が持つイメージを優先させたということである。

その後も、ことあるごとに色々な人にハンナのイメージを聞いてみたところ、やはり四十代以下の日本人はほとんどが「黒人だと思う」と答え、他社の四十代の児童書編集者も首をかしげつつ、「アニメでは黒人でしたよね」というコメントにとどまった。

五十代以上に関して言うと、『若草物語』を本で読んだだけの人と、親として自分の子供と一緒にアニメの『愛の若草物語』を見た人ではイメージが分かれる。後者の人はほとんどが「黒人」と答える。ビジュアルの持つ力の大きさを知らしめる興味深い事例だが、もしひとことでもハンナの外見に触れた記述があれば、イメージも統一されたはずである。

さて、アニメを見た人が「ハンナは黒人」と答えるのなら、物語だけ読んだ人は「白人」と答えるのだろうか。あるいは、黒人と白人に分かれるのだろうか。

意外なことに、物語だけ読んだ人の多くの反応は、そのどちらでもなく、圧倒的に「？」だった。

「ハンナ…？ そういえば、いたねえ」とか、「ぜんぜん覚えていない」「覚えているけど、どんなイメージかと言われても…」という感じで、記憶が曖昧なのである。少なからず活躍しているはずのハンナの印象が薄いのは、やはり具体的な描写に乏しいからであろうか。

アニメを見ていないのに「黒人ではないか」という意見をもつ根拠は、娘が働きに出なければならなかったり、危篤の父のところに妻である母がかけつけるための旅費を嫌いなマーチ叔母から借金したり娘が髪を売ったりしなければ工面できないほど没落し、「貧しい」はずのマーチ家が、なぜ家政婦を雇えるのかという点にある。

日本人の感覚として、まず「お手伝いさんを雇えるのはお金持ち」であり、それが住み込みであればなおさらのことである。また、移民国家の複雑さを知らない日本人の目から見て、米国人は「白人か黒人のどちらか」という感覚があり、「同じ社会的ステータスの人をそんなに安く雇えるはずがない」という印象もある。実際ハンナは日本の元旦に相当するような祝日であるクリスマスの日も労働をしているのであり、マーチ家がそれにふさわしい高額給料を払っているとも思えない。家族の口からハンナの存在や働きに対する感謝の言葉が出ることも驚くほど少ない。マーチ家が没落してすべての使用人が去ったあと、それでもひとり残ったハンナは、自由人になったあとも自ら進んで残留した家内奴隷であると考えたと確かに辻褄が合う。明らかに白人であるフランス人のエスターとの違いにも納得がいく。

2017年7月、筆者はアメリカ東海岸の旅行ツアーに参加し、コンコードのオーチャードハウスを訪れた。ルイザ・メイ・オルコットの住んでいた家であり、オルコット記念館にもなっている木造二階建てのカントリー風の屋敷である。

筆者は、帰国後、館長の Jan Turnquist 氏と日本人スタッフの喜久子ミルズ氏に、それぞれ英語と日本語で手紙を書き、ハンナのアイデンティティについて質問した。が、それに対する返事は得られなかった。もしかしたら、人種問題を抱えるアメリカで、使用人 (servant) として登場する人物が黒人だと思うか、白人だと思うか、という問いはふさわしくなかったのだろうか、と思い、そのときはあきらめていた。(実際、のちに Jan 館長と話す機会が得られた時も、彼女はハンナのことを作中使われている servant ではなく housekeeper と言い換えていた)

しかし、2019年8月、筆者は機会を得て再びボストン、コンコードを訪れることになる。

事前にボストン公共図書館を調べてみると、レファレンスの受付をしていることがわかったので、ルイザがまだ生きていた時代の『若草物語』で、ハンナの挿絵があるものはないか尋ねる旨を書いて申し込んでみた。

予約した日に訪れると、図書館員が、ルイザの没後のものだが、と断ったうえで、同時代の出版物からこのような画像を用意してくれていた。



The "Little Women" play; a two-act, forty-five minute play by Elizabeth Lincoln Gould (1900)

これは、『若草物語』の劇の台本にある人物紹介である。ハンナは痩身の白人女性のイメージということになる。作品から受ける印象よりやや高齢である気がするのは筆者だけであろうか。

そういえば、『若草物語』は過去に何度も映画化されているが、そこでもハンナは白人女性によって演じられている。2020年にまた新作が公開されるとのことだが、おそらくはそこでもこのような姿の女優がハンナを演じることと思われる。

さて、2度目のオーチャードハウス訪問では、筆者が拙訳の『若草物語』と、その韓国語版とを持参したところ、非常に温かい歓迎を受けた。その勢いで Jan 館長に、ハンナについても一度質問してみると、2年前の手紙は彼女にも喜久子さんにも届いていなかったことが判明。今回、改めて Jan 館長にハンナのアイデンティティは、と聞くと、即答で「アイルランド人です」という返事であった。

ハンナの出自は作品中には書かれていないはずだが、その根拠は、と重ねて尋ねると、当時のアメリカ北部、特にボストンには、じゃがいも飢饉のために大量に流入したアイルランド移民が多く労働力となっていたこと、ハンナの話し方にアイルランド訛りがあることを挙げた。

Jan 館長の言う「アイルランド訛り」について多少調べてみると、「アイルランド英

語」というものが存在することがわかる。当時、移民の中でもアイルランド人が重宝された理由のひとつに、彼らが英語を話すことがあったとされている。イングランドとの関係のなかで、アイルランドではすでに英語が第二公用語として取り入れられていて、アイルランド人は母国語のアイルランド語と並行して英語を---アイルランド語の影響を受けた英語を---使いこなしていた。そのことは、労働者階級の中では、他のヨーロッパ地域からの移民より優位に立つ大きな要因となっていた。

『若草物語』のなかで、貧しいはずのマーチ家がさらに施しをする相手のフンメル一家はドイツからの移民である。フンメル家は男手がないことのほかに、言葉が通じないことが極貧の要因であることが物語のなかからうかがえる。多少変則的なものであったとしても、英語が使えるアイルランド人のほうが、住み込みの家政婦も含め、他の国の移民よりも職に就きやすかったことは想像にかたくない。

また、大量流入したアイルランド移民に対し、その時代のアメリカ北部に、黒人の数はそう多くはなかった。

ルイザの父、ブロンソン・オルコットの盟友であったソローは、代表作『森の生活』のなかで、黒人の過酷な境遇と生活について述べている。森に逃亡して原始的な生活をしていた黒人もいたようである。いずれにしても、当時の北部に黒人人口が占める割合は低く、ソローが「外から来た」彼らの生活に、未知のものとしての関心を持っていたことがうかがえる。

ブロンソンもソローも、逃亡奴隷をカナダに逃がした経験をもっている。奴隷制が廃止されたあとも、この時代、黒人たちにはまだ「元奴隷」であることの影響が残されており、正式な英語教育を受けた黒人は少なく、（ルイザの父ブロンソンは、自らが建てた学校に黒人の子供を入学させたことで閉校に追い込まれている）識字率も高くはなかったと考えられる。

ハンナは、夫の看病に行っているマーチ夫人に、たどたどしいながらも自分で手紙を書いている。元奴隷であるにしろ、自由黒人であるにしろ、一家の「友だち」として、読み書きができ、娘たちに絶大な権威をふるうハンナが、少数派の黒人であった可能性は数のうえからしても、さまざまな状況証拠からしても、かなり低いと言えるだろう。

結論としては、アメリカでは、ハンナはアイルランド系白人女性という共通認識で一致しているようである。

それでは、オーチャードハウスの Jan Turnquit 館長は、日本人のもつイメージに対してどのように考えるであろうか。

場合によっては、筆者が持参した学研版が受け入れられないかもしれない、という不安はあったものの、ここは率直に、「日本ではテレビアニメの影響で、多くの人がハンナは黒人だというイメージを持っていて、私が編訳した本の挿絵もハンナは黒人のように描かれているのですが、それについてはどう思われますか」との質問をぶつけてみた。

驚いたことに、Jan 館長は、1980年代の日本のアニメの存在を知っており、そこでハンナが黒人とされていることも、その影響で日本では一般にハンナが黒人と思われることも認識していた。

「アニメの制作者が、ターバンを巻いた黒人のメイドがホットケーキにシロップをかけているアメリカのテレビコマーシャルを見てヒントを得たそうです。これは、私が日本の制作会社に直接聞いたことです」

と、Jan 館長は語った。筆者は、「そのとき、それは間違いであるという指摘はしなかったのですか」と質問した。すると、オルコット記念館の館長はおおらかな笑みを浮かべて言った。

「“Little Women”のすべての登場人物には実在のモデルがいます。唯一、特定のモデルがないのがハンナです。彼女ひとりが fiction なのです。fiction なのだから、彼女は誰であつてもよいのです。」

ルイザ・メイ・オルコットは、このたったひとりの「架空」の人物に、どのようなイメージを抱いていたのであろうか。マンガのように、恰幅のいい「肝っ玉母さん」のような風貌だったのだろうか。台本の挿絵のように、ちょっと厳しそうなやせぎすの老女だったのだろうか。筆者が編訳した本のイラストのように、たくましそうなアフリカ系アメリカ人だったのだろうか。

fiction であるハンナに姿を与えなかったオルコットの意図は永久にわからない。

おそらくは、その時代、その社会で、old + 女性の名前によって、ある程度の共通のイメージというものがあつたのだろう。そしてそれはアイルランドからの移民家政婦である可能性が高いことは確かである。

しかし、現実のモデルがないためか、もともと物語のなかでもハンナは主人公の四姉妹やそれを取り巻く人々にくらべ若干人間性に欠け、今ひとつ人物像が見えてこない。

そして、結果的に、その分ミステリアスな魅力と想像の余地を残している。

ハンナは白人であるかもしれないし黒人であるかもしれない。案外若いかもしれないしものすごく年寄かもしれない。料理が得意であることはわかっているが、苦手な家事もあるかもしれない。家族はいないようだが、休みをもらえば近くの親戚の家に遊びに行くのかもしれない。マーチ家の一員のようにして普段は幸せに暮らしているが、時には眠れない夜に子どもの頃や両親のことを思い出して涙するかもしれない。隣の庭師からラブレターが届いて四姉妹に笑われたこともあるが、もしかしたら人知れず真剣な恋をしたこともあつたかもしれない…。

150年の時を経て、バイプレイヤーのハンナについてあれこれ想像をめぐらせている日本人がいると知ったら、ルイザはおもしろがってくれるだろうか。それとも呆れて、舞踏会の際のメグのように、眉をつりあげるのだろうか。

Who is Hannah?

彼女の物語は尽きない。

2. 『あしながおじさん』のプリチャードさん

2-1 物語の概要

『あしながおじさん』は、1912年に出版された、ジーン・ウェブスターによる小説である。作中に、1868年出版の『若草物語』のエピソードも登場する。

主人公ジルーシャ・アボットは、両親の顔も知らないまま、16歳まで孤児院で育つ。孤児院のリペット院長はジルーシャにきびしくあたり、小さい子の世話をさせたり、理事が来る日には掃除をさせたり、と、こき使っている。

しかしある日、ジルーシャの書いた作文が訪問委員の目にとまる。そして、紹介された作文が気に入ったあるひとりの裕福な理事が、彼女を大学に行かせようと申し出る。

ただし、その理事は顔や名前を知られることを厭い、ジルーシャには、「ジョン・スミス宛」に大学生活の報告の手紙を書くよう要求する。

ユーモアと想像力にあふれたジルーシャは、そんなつまらない名前は好まず、その匿名の篤志家に「あしながおじさん」というニックネームをつけて手紙を書く。

この小説は、冒頭の孤児院のシーン以外は、すべて手紙だけで語られるというユニークな形式である。しかも、往復書簡ではなく、ジルーシャ（大学生活が始まってからはジュディーという通称）から「あしながおじさん」への一方的な手紙のみである。

ひとりの手紙だけで物語を最後までひっぱっていく作者ジーン・ウェブスターの力量は相当のものであり、また、当時これは画期的な手法でもあった。物語のおもしろさに当時の女性の地位向上の風潮が後押しをして、Daddy-Long-Legs（『あしながおじさん』の原題）はたちまちベストセラーの仲間入りをする。

主な登場人物は、主人公ジルーシャ（ジュディー）・アボット、その親友のサリー・マクブライト、サリーのルームメイトのジュリア・ペンドルトン、サリーの兄のジミー・マクブライト、ジュリアの叔父ジャーヴィス・ペンドルトン、孤児院のリペット院長、それにロックウィロー農場のセンプル夫妻、などである。

2-2 忘れられた最重要人物

ところが、ここにまた「忘れられた重要人物」がいる。その「忘れられぶり」は、『若草物語』のハンナの比ではない。しかも、「重要人物ぶり」はハンナ以上である。その名は、「訪問委員のプリチャードさん」。

なぜこの人物がそれほど重要かという、まずはプリチャードさんがジルーシャ・アボットの『ゆううつな水曜日』という作文を発見し、ジョン・グリーア孤児院を支援している理事たちの前で読み上げることがなかったら、この物語は始まらない。「あしながおじさん」は愛すべき孤児ジルーシャ・アボットの存在にすら気づかず、ジルーシャは学校

を卒業後、どこかの家のメイドになるしかなかったはずなのだ。筆者は子供の時にこの事実に気づいたとたん、恐ろしさにふるえんばかりの勢いで「プリチャードさん」に感謝をささげたものだった。

さて、いったん「あしながおじさん」の援助が決まると、プリチャードさんは、大学入学までのひと夏、ジルーシャの教育を買って出してくれる。ジルーシャは入学するとたちまち「普通のお嬢さん（「普通」より上流の家庭の子女ではあるが）たちの中に入ってとまどうことに多々ぶつかるのだが、それでも最低限必要なマナーや言葉遣いは、それまでに身につけていたと思われる。立ち居振る舞いの何もかもがおかしかったわけではなく、同級生たちもみなジルーシャが自分たちと同じ中流、あるいは上流家庭の出身だと思い込んでいたのだから。

余談だが、ジルーシャが知らなかったいくつかの「一般常識」の中に、『若草物語』も入っている。ジルーシャは、『青い鳥』の作者メーテルリンクについて「その方、一年生？」と聞いて失笑を買うのだが、そういったことを機に猛然と本を読み始める。

I have four going at once. Just now, they're Tennyson's poems and *Vanity Fair* and Kipling's *Plain Tales* and ---don't laugh---*Little Women*. I found that I am the only girl in college who wasn't brought up on *Little Women*. ----and the next time somebody mentions pickled limes, I'll know what she is talking about!

私は 4 冊の本をいっぺんに読んでいます。テニソンの詩に『虚栄の市』、キプリングの短編集、それに---笑わないでくださいね---『若草物語』です。大学には、これを読まずに育った人なんて、私ひとりしかいないらしいんです。[中略] でも、これで次にだれかがライムの塩漬けの話をして、何のことだかわかります！（筆者訳）

さすがのプリチャードさんをもってしても、女子大に入る前の読書リストまでは手が回らなかったらしい。けれども、この訪問委員は、ジルーシャが大学に入ってから、様子を見に来てくれたり、ドレスの見立てにつきあってくれたり、なにくれとなく面倒をみてくれる。

筆者が初めて『あしながおじさん』の物語を読んだのは、『若草物語』と同じ、偕成社の「少年少女世界の名作」の版（ウェブスター原作 露木陽子著 1965年）であった。

子供向けということで、手紙形式ではわかりにくいと考えたのであろう、著者によって物語形式に書き換えられている。原作にない加筆も多い。その中に、「ピンクの夜会服」（P65）という章がある。訪問委員のプリチャードさんが現れて、ジュディーに夜会服（evening dress）を買ってくれる、というシーンである。

この章には多くのページが費やされていて、「プリチャードおじさま」が大学にふらりと現れ、ジュディーに「服を買いに行こう」と誘うところから始まる。そこからふたりは

店に行くのだが、高級店で買い物に慣れていないジュディーは尻込みしてしまう。しかし、ジュディーがいくら遠慮しても、プリチャードおじさまは「うん、よしよし、わかった。まあ、おじさんにまかせておきなさい」(P68)と言ってあれも、これも、と、金に糸目をつけずにすてきなドレスをどんどん選び出す。結局ジュディーは6枚もの「夜会服」を買ってもらう。もちろんそのお金はあしながおじさんが出してくれていることをジュディーは知っているので、感激と感謝の手紙をしたためる、という内容である。

「おじさま」とジュディーの会話も活き活きと描かれていて、子供だった筆者にとって最も印象的な場面のひとつである。それだけに、この「プリチャードおじさま」とはいつい何者だろうという好奇心もむくむくと頭をもたげてきた。Who is Pritchard?

実際は、ジュディーがこの人物に対して、あまりに親しみをこめて「おじさま」「おじさま」と連発するものだから、子どもだった筆者はジュディーがあしながおじさんに呼びかけるときの「おじさま」とだぶって混乱をきたしたのである。そして、小さい脳味噌で導き出した結論は、「きっとこの人が『あしながおじさん』なんだ!」ということだった。

シャイなプリチャードおじさまは、ジュディーから直接の感謝を受けるのは照れくさいので、匿名の理事がいることにして、自分はその代理を演じているのだ、と。そもそも子供にとっては「訪問委員」も「理事」もいっしょくたに「えらいおじさん」であり、リペット院長にとっても絶大な権威である「理事」と、一般の「委員」の区別もつかなかった。

この思いつきにすっかり悦に入り、途中で犯人をつきとめた推理小説の読者さながら、自分だけがわかっている嬉しさと得意にほくほくしながら読み進め、最後の最後に「あしながおじさん」が実はジュリアの叔父ジャーヴィス・ペンドルトンとわかった瞬間、ひっくりかえって驚いたことは忘れられない。

けれども、同時に、「訪問委員のプリチャードおじさま」もまた強烈な存在感をもって小学生だった筆者の記憶にしっかりと刻み付けられたのだった。

後年、自分もいくつかの版で完訳本を読む機会があったが、初めて読み、繰り返し読んだこの偕成社版の物語には今でも特別な思い出があり、当時の印象を拭いさることがなかなかできない。そして、大人になって初めて『あしながおじさん』を読む人は、あしながおじさんの正体はジャーヴィーぼっちゃんであることに読んでいる途中ですぐ気がつくものなのだ、と知ったときは、むしろそちらのほうに少なからぬ衝撃を受けたものだった。

2-3 プリチャードさんの正体

2015年、『若草物語』のときと同じく学研教育出版(現・学研プラス)の「10歳までに読みたい世界名作」シリーズで『あしながおじさん』の編訳の仕事をいただいた。そして、何年、いや、何十年かぶりに完訳版を読み返し、また原書を取り寄せて初めて英語で通読したとき、筆者はさらなる衝撃を受けることになる。原書の文中に、‘Miss Pritchard’の文字を発見したのだ。なんと、「訪問委員のプリチャードさん」は女性だった!

あのすてきな「プリチャードのおじさま」は私の勘違いだったか！？と、あわてて自室の本棚にかけつけ、偕成社版の『足ながおじさん』のその箇所を開いてみると、確かにジュディーは「プリチャードのおじさま」と呼びかけている。昭和 40 年代、「訪問委員」という役職が男性を連想させたことは想像にかたくないが、それだけでここまで生き活きとした年配の紳士の人物像を作り上げていたとは。ある意味著者に感服でもある。

さらに、原書では、「ピンクの夜会服」にあたるくだりは、ジュディーの手紙の中で 1 ページに満たない分量で（しかし感激をもって）触れられているにとどまる。

You've never heard about my clothes, have you, Daddy? Six dresses, all new and beautiful and bought for me---not handed down from somebody bigger. Perhaps you don't realize what a climax that marks in the career of an orphan? You gave them to me, and I am very, very, very much obliged. It's a fine thing to be educated---but nothing compared to the dizzying experience of owing six new dresses. Miss Pritchard, who is on the visiting committee, picked them out---not Mrs. Lippett, thank goodness. I have an evening dress, pink mull over silk(I'm perfectly beautiful in that), and a blue church dress, and a dinner dress of red veiling with Oriental trimming (makes me look like a Gypsy) and another of rose-colored challis, and a gray street awfully big wardrobe for Julia Rutledge Pendleton, perhaps, but for Jerusha Abbott---oh, my!

ここから、9 ページにわたるかの洋服店のシーンにふくらませた力量には敬服するが、その著者がプリチャードさんは女性であることを知ったら、筆者以上に衝撃を受けることであろう。しかし、この誤解がなかったら、ほんとうの重要人物である「訪問委員のプリチャードさん」はハンナ以上に読者の記憶から（少なくとも筆者の記憶からは）消されていたにちがいない。まさに怪我の功名である。

ところで、このプリチャードさんが属する *visiting committee* とはどのようなものなのだろうか。訳書では、「視察委員」か「訪問委員」と訳出されることが多いが、北米でさまざまな活動に使われていることばのようである。*visiting committee* の役割や地位に関して統一した規準はなく、各 *committee* によってまちまちであるが、文字通り「視察」や「訪問」が主な仕事である場合が多いようである。いくつかの英和辞書には「刑務所視察官」とあるが、プリチャードさんはこれには当たらない。筆者が編訳した『あしながおじさん』では、子どもにわかりやすく「地区委員」とした。実際、リベット院長のせりふの中に、プリチャードさんは孤児院と学校の両方の *visiting committee* を兼ねている、という説明がある。地域社会のために奉仕する人をさしていると思われるため、この訳語にした。

いずれにしても、作中の「プリチャード」さんがどのような人物であったのか、原作の物語中にはまったく現れてこない。わかっているのは未婚の女性であることだけである。ただ、Miss とあるからといって、若い女性とはかぎらない。結婚していなければ年をとつ

ていても Miss だからである。

ジルシーの作文能力を見出し、大学入学までの教育を買って出て、ドレスの見立てまでしてくれる彼女が、善良で賢くて愛情深く、センスがいいであろうことは想像できる。しかし、その年齢や外見はまったく未知のままである。原書にはせりふもないので、『若草物語』のハンナ以上に姿が見えない。そのうえ、「あしながおじさん」宛の書簡なのだからいたしかたないといえそうだが、ジュディーの手紙の中にはプリチャードさんへの感謝はほとんど述べられていない。ひとこと、ドレスを買ってもらったときに「リペット院長の見立てでなくてほんとによかった！（not Mrs. Lippett, thank goodness.）」と言っているのみである。

物語のキーマン、いや、キーウーマンであるにもかかわらず、なんとも粗雑な扱いだと思わざるを得ないのだが、ハンナ同様、記述が少ない分、想像の余地は残る。

手紙に書かないだけで、ジュディーは顔も知らない「あしながおじさん」を父のように慕ったのと同様、「訪問委員のプリチャードさん」を母のように思っていたかもしれない。あるいは、プリチャードさんは若く美しい二十代で、ジュディーは大学に入る前のひと夏を、この女性と姉妹のように過ごしたのかもしれない。または、プリチャードさんは厳格な教師のような人で、数か月で良家の子女のように見えるようになるまで、スパルタ方式で徹底的にジュディーを仕込んだのかもしれない（そうでなければ、孤児院しか知らないジュディーが名門女子大生のなかにすぐにとけこめるはずがない）。等々、プリチャードさんの人物像はいくらでも広げることができる（原書を見てしまった以上、老紳士だけはあてはまらないのだが）。

Who is Pritchard?

これもまた、百年以上前の女流作家が期せずして遺してくれたすてきな謎なのかもしれない。

3. 結び：19世紀米文学におけるリアリティ

筆者は児童書の創作もいくつか手がけているが、草稿の段階でよく編集者から指摘されるのが登場人物のリアリティについてである。

それがたとえファンタジー作品であったとしても、物語世界のなかでの整合性というもののが求められる。つまりは、舞台が現実世界であろうが架空の世界であろうが、そこに登場するキャラクターは必ずバックグラウンドに裏打ちされた存在意義が必要とされるのである。

そういう意味では、『若草物語』も『あしながおじさん』も、今、現代日本で（あるいはアメリカでも？）これらの作品が編集部を持ち込まれたら、おそらくはハンナの経歴やプリチャードさんの人物像が描かれていない、という理由で書き直しを求められるにち

がない。

けれども、リサーチを進めながら気づいたのは、そこがこの二作品の、あるいは 19 世紀文学の、魅力であるかもしれないということであった。

子どものころに大好きだったこのふたつの作品が、どちらもアメリカ北部の比較的近いところが舞台（ボストン近郊のコンコードとニューヨーク近郊のヴァッサー大学）であり、ほぼ同時代（1868 年と 1912 年）に書かれたということは、最近まで知らなかった。

しかし、同じシリーズでこの 2 作品の編訳の機会に恵まれたこと、その後 2 回もこれらの舞台を訪れることができたことには、ひとかたならぬ縁を感じる。

バイプレイヤー以外にも、この二作品についてはまだまだ取り上げたいテーマがたくさんある。本稿を機会に、今後も研究を続けていきたい。

Special Thanks: Ms Jan Turnquist, Exective Director, and Ms Kikuko Mills (喜久子・ミルズ), Special Project, of Louisa May Alcott's Orchard House in Concord, MA, USA

参考文献

- Alcott, Louisa May (1989) *Little Women*, the Penguin Group.
 Gould, Elizabeth Lincoln (1900) *The "Little Women" play: a two-act, forty-five minute play*, Philadelphia: Curtis Publishing Company.
 Webster, Jean (1989) *Daddy-Long-Legs*, introduced by Eva Ibbotson, the Penguin Group.
 伊藤詔子 (2016) NHK カルチャーラジオ文学の世界『はじめてのソロー：森に息づくメッセージ』NHK出版
 ウェブスター、ジーン(1954)『あしながおじさん』松本恵子訳、新潮文庫
 —— (1988)『あしながおじさん』谷川俊太郎訳、理論社
 ウェブスター/露木陽子 (1965)『足ながおじさん』偕成社
 オルコット (2004) 『若草物語』矢川澄子訳、福音館文庫
 オルコット/富沢有為男 (1969) 『若草物語』偕成社
 オルコット/nev (2011) マンガジュニア名作シリーズ『若草物語』学研教育出版
 オフィス JB (2014)『懐かしの 80 年代アニメ大百科』双葉社
 黒岩千恵 (1996) 「アイルランド系米国移民研究史」 「エール」 通号 16
 ソロー、ヘンリー・D (1998)『森の生活』真崎義博訳、宝島社文庫
 横川寿美子 (2015) 「『若草物語』の三つの映画化：あなたはどのジョーが一番好きですか？」 「児童文学とそのマルチメディア化：H26 年度国際子ども図書館児童文学連続講座講義録」より講座レジュメ、国立国会図書館国際子ども図書館
 結城英雄・夏目康子編 (2016) 『アイリッシュ・アメリカンの文化を読む』水声社